

令和5年度小松市立東陵小学校 学校評価 1(中間)

めざす児童生徒像

- なりたい姿に向かってチャレンジできる子
○自分や友達のがんばりや成長を見つたり、応援したりできる子
○自分で考えてすすんで行動(学習)できる子
○他者と話し合い、問題を解決したり、新しい考えを生み出したりできる子

※児童生徒結果一教員結果・保護者結果

目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	数値・アンケート結果(%)			※差	達成状況の分析	改善策
				教員	児童生徒	保護者			
(学校重点項目)	自己肯定感の向上	生徒指導 ①②③の平均が 中間・・・85%以上 期末・・・90%以上	① 児童が「学校が楽しい」と感じている。	100	93.2	96	-6.8	①②③すべて平均が85%を上回り、中間の数値目標を達成できた。このことから自己肯定感の向上がはかられていると考える。理由として、各学年での「なりたい仲間」の取組や、6年生が企画運営する「学校会議」の設定と達成感がこの結果につながったのではないかと推測される。④に関しては、「なりたい自分」の取組や授業・行事後に自己の成長を振り返る場を設定したこと、日々の児童へのプラスの声掛け、かわりがこの数値につながったと推測する。	①③について、引き続きキラリタイムや「なりたい仲間」・「学校会議」の取組を一層充実させ、クラスや学校の自治力を高め、人間関係づくりを推進していく。 ②④について、90%を超えられるよう、「なりたい自分」の取組を継続して行い、自分のよさに気づいたり、教師が児童の頑張りをより行動を価値づけたりすることで、自己の成長をメタ認知させる。行事等のキャリアパスポートや作文等を活用し、自己の振り返りを充実させる。
			② 児童が「自分に成長したところがある」と感じている。	88.9	89.7	94.9	0.8		
			③ 児童が「楽しい学校、成長できる学校をみんなで作っている」と感じている。	100	94.9		-5.1		
			④ 教員、保護者は、定期的に児童(一人一人)の成長やよさを伝えたり、児童に肯定的なメタ認知ができる場を設定したりしている。	100	92.3	93.9	-7.7		
			集計						
重点項目	業務の改善 働き方や 石川県共通	①②の平均が 中間・・・85%以上 期末・・・90%以上	① 80時間越えゼロに向け、時間外勤務の削減に取り組んでいる。	90				超過勤務が80時間を超えた職員はいなかった。4～6月の超過勤務時間平均は50時間であり、昨年度の58時間より減少した。	担任業務支援、教材研究の時間確保のため、日課や支援員の配置等の工夫、校務の平準化等を推進し、誰もがやりがいのある職場作りを目指す。
			② 学校組織の中で自分の役割が明確であり、創意工夫しながら取り組むことができている。	100					
			集計						

目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	数値・アンケート結果(%)			※差	達成状況の分析	改善策
				教員	児童生徒	保護者			
小松市共通重点項目	学校研究	①②の平均が 中間・・・85%以上 年度末・・・90%以上	① 研究主題に迫る目指す授業スタイルを共有し、単元(授業)構想シートなどの具体的な取組を共通実践している。	88.9				①②ともに、中間の目標指標を上回った。①は、年度初めに授業集を開き、「授業スタンダード」を提案し、授業の流れを児童と共有した成果である。また毎月全校集会で授業についての話をし、授業大挑戦に取り組んだこともよかったと考えられる。しかし、昨年度末よりポイントがダウン(人数にして一人)、単元構想シートの提案が遅れ、具体的な取組がなかなか進まなかった。②は、模擬授業での授業内容の共有、子どもの姿という視点を明確にした授業の参観によって、主体的に取り組めたと推測する。	①学期初めの授業集、全校集会での話を継続し、児童との共有を図ることで教員での理解を深めていく。また単元構想シートは、夏季休業中に個人で作成し、使い方を交流することでその意義理解を深めていく。 ②今後も、研究全体で指導案検討や模擬授業を明確に位置づけ、意義ある研究授業となるように工夫する。そして、研究授業の成果や課題は、事前に設定した見取りの観点や子どもの姿から考える整理会を展開する。また、よさや課題を全校のものとして捉え、次回まで取り組むこととして焦点化し、取り組んでいく。
			② 授業研究では、教職員一人一人が子供の姿を語ったり、改善案を示したりするなど主体的に取り組んでいる。	100					
			集計						
			集計						
	「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善	①～④の平均が 中間・・・80%以上 年度末・・・90%以上	① 児童生徒は、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。	100	90.4		-9.6	①目標指標は達成、数値も昨年度末とほとんど変わらない。しかし、児童との考えと、児童によって取り組む課題の必要感のある課題となっていないことが分かる。見取りや取組の観点も教員と児童で差が大きい。しかも、児童は昨年度末より-6.4%。教員は、研究や研修を通して、考えを深める手立ての理解は深まっているが、児童に実践が伴っていないことが分かる。 ②児童は目標指標が達成できなかった。「実証的説明」を意識化するあまり、ハードルが高く、基本の発問につながらない児童が多いことが原因として考えられる。 ③「授業スタンダード」の「静観」を「授業大挑戦」に位置づけ、聞くことの徹底を図ってきた。全体に声をかけて話を聞ける児童が多い。しかし、友達の考えの相違点を考えることが難しいようである。 ④この項目も教員と児童で差がある。教員は、授業の始まりにふり返りを取り上げることを見つけて、学びの深まりや本時のつながりを感じている。しかしタイムマネジメントに課題があり、児童が学びを蓄く時間の確保ができていないのが反省である。 ⑤学校研究として、ICT機器の活用方法を共通理解し、実践してきた。教員は昨年度に比べ具体的な活用場面が広がっている一方で、児童が使用する回数が増えている。しかし、意見を交換しやすい観点から、活用率が低いと考えた教員が多い。加えて、低学年が調べ学習で使用するのまだ難しいことも考えられる。	①各自が作った構想シートを使って、授業展開について研究会で交流する。その際には、児童にとって有意義な課題となっているという視点をもって交流し、改善していくよう努める。さらに、個別達成率や学習目標の活用観点からの授業改善についても話し合っていく。 ②「算数授業一歩一歩」を使って教員の発問意識を高め、児童が焦点を絞って問いがきくように授業を工夫する。また授業の始まりでは、前時のふり返りを取り上げ、考えを深めたり広げたりすることを価値づけ、意義を伝えていく。 ③「話し合いプロフェッショナルワード」の基本「説明プロ」に戻り、発表の仕方を振り返る。模範を示したり、友達の良いところを褒める際に、発表を促すことを積極的に促していく。また、発表を全校の観点として取り上げ、重点事項を設定して取り組む。その際には、児童の「たいせつ」を丁寧に確認し、文の構成に着目させる。 ④ベアやグループ交流の取り入れ方について研修し、話し合い活動の理解を深め、実践していく。また構想シートを使い、発問し内容をアクロアットする機会を意識的に取り入れる。 ⑤授業中の児童を構想段階で明確にもち、タイムマネジメントに活かす。ふり返りを含める際には、発問を構想し重点化し、低学年は構想も提示する。また発問段階に応じて、量や質の目標を決め、適切に価値づけていく。 ⑥今年度カリキュラムマップに位置づけた「ICT」の活用を達成できるように、発達段階に応じた指導を具体化していく。また学習端末活用の交流では、意見を交換するための使い方にいて、更なる方法を研究し、実践を交流する。
			② 児童生徒は、学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている。	100	85.2		-14.8		
			③ 児童生徒は、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表している。	88.9	72.2		-16.7		
			④ 児童生徒は、話し合う活動では、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、友達の考え(自分と同じところや違うところ)を受け止めて自分の考えを伝えている。	88.9	87.8		-1.1		
			⑤ 児童生徒は、振り返る活動の中で、授業の目標に沿って自分の学びの変容を実感したり、学びに対する達成感を得られたりしている。	100	88.7		-11.3		
			⑥ 児童生徒は、コンピュータなどのICT機器を、他の友達と意見を交換したり、調べたりするために使用している。	66.6	93.9		27.3		
			集計						
	カリキュラム・マネジメント	①②③の平均が 中間・・・85%以上 年度末・・・90%以上	① 指導計画の作成に当たっては、学校の教育目標の実現に向け、各教科等の教育内容を教科横断的な視点で組み立てている。	100.0				・①②③④いずれも、教員アンケートの結果は100%であり、目標指標の85%を上回った。教育課程の編成・指導計画の作成にあたっては、昨年度カリキュラムマップを一新したものを、より教科横断的に活動を仕組んだりPDCAを実施しやすしたりしたことが目標達成につながっていると考えられる。 ・学期初めに、昨年度末に実施した校内学力調査の結果をもとに、担当学年の課題を見出し、授業単元としてカリキュラムマップに位置づけ、力をつける手立てを考えた。夏季休業中にも、今年度の学力調査結果をもとに分析を行い、2学期以降の重要単元と指導の工夫を考える校内研修会を設けたことで全職員で共通理解をはかりながら学力向上の取組を進めることができた。 ・小・中学校連携では、主任を中心に情報交換を行うことができた。	・カリキュラムマップを定期的に見直し機会を持つことを継続する。その際に、各担当学年の教材を教科横断的な視点で見直しより働きかける。 ・学力調査分析で検討した手立てを、カリキュラムマップにつなげ、学力調査から見える課題を克服するための具体的な指導方法を提案し、実践していく。 ・審判タイムを中心とした学力向上の取組については、月例の「PDCAの会」で実施状況や課題を把握・共有し、システムとして有効に機能するように、その都度修正しながら進めていく。 ・日課の見直し、研修会の設定、教材研究の時間確保等の学力向上につながる取組についても主任会等で定期的に検証していく。
			② 全職員が学力向上の取組の目的や意義を理解し、課題の解決を期待できると納得して共通実践に取り組んでいる。	100.0					
			③ 校区の小・中学校間で学力について情報交換し、課題について共有している。(小中連携)	100.0					
			集計						
			集計						
	家庭学習	①高学年の「家で計画を立てて勉強している」 ②家庭学習で学習用端末を活用する 80%以上にする。	① 家庭学習の取組として、学習方法や課題の課し方等を校内で共通理解を図っている。	100	85.7		-14.3	児童アンケートにおいて、計画的に家庭学習に取り組む割合は高学年では88.9%であった。「家庭学習ががんばり週間」や「自学」の取組では、計画を立てて学習する意識ができた。またテスト等の目標を事前に知らせ、見通しをもって学習に取り組むように指導したことが肯定的回答につながったと推測している。②の学習用端末の家庭学習での活用状況は数値が低かった。1学期ということもあり、低学年の取組は難しかったので、今後機能的な活用を推進していきたい。	より目的意識をもって家庭学習に取り組むことができるように、目標に照らしながら一定のメンで見直しを取り組むことができよう計画の立て方を提案し指導していく。学級の状況に応じて計画を立てる時間を確保し、4～6学年で取り組むように改善する。併せて、学習用端末の家庭学習での活用を徹底をはかり、効果的な活用方法について模索。 ・計画的に家庭学習を進めることと良さを児童自身が実感できるようにするため、取組を振り返る機会を設ける。
			② 学習用端末を活用した家庭学習に取り組めるよう課題を工夫している。	77.8	53		-24.8		
			集計						

令和5年度小松市立東陵小学校 学校評価2

	目標・具体的取り組み	取組の状況（中間・8月提出）	取組の成果と課題（年度末・3月提出）
生徒指導	〈自己肯定感や共感的人間関係及び自治力を高めるために、学級活動や帯タイムにおける共通システムを効果的に推進する〉 ・学級活動！(学級会)において「なりたい仲間・学級」の姿を決める一実行する一振り返るという取組を通して、自治力の向上を図る。（2か月に1度） ・個人で「なりたい自分」の姿を考える一実行する一自己による肯定的な振り返りを通して自己肯定感の向上を図る。（1か月に1度程度） ・キラリタイムでの「おしゃべりキラリ」や「先生キラリ」を設定し、クラスや異学年の交流を通して、共感的人間関係の構築を図る。（毎週月曜日の帯タイム） ・学期に一回「東陵っ子フェスティバル」を開き、クラスや異学年の交流を通して、共感的人間関係の構築を図る。	・「なりたい仲間」の実践として1～2か月ごとに実行、ふりかえる活動を取り入れた。そのことでクラスの今の課題を全員で考え、意識し、成長につなげることができている。また廊下に掲示したことで、各学年の取組や現状を教師・児童ともに見ることができ、お互いに取組の共有ができた。 ・「なりたい自分」の姿を月初めに考え、1か月意識し、帰りの会でふりかえたことで少しずつだが、自分の課題を克服できるようになってきている。また、教師もそれについて児童の頑張りを認め、価値づけることができた。 ・キラリタイムや東陵っ子フェスティバルの実施により、縦と横の人間関係の構築、学校への楽しさを感じられる活動になっている。休み明けに実施することが多いので、欠席や遅刻の抑止にもなっていると考える。今後も、共感的な人間関係づくりを進めていく。	
特別支援教育	〈個に応じた支援システムを効果的に推進する〉 ・個人ファイルや配慮が必要な児童についての個別の支援シート及び児童理解の会での情報交換を通して、毎月個々の児童の正確な現状を把握し全体で共通理解する。記録システムを円滑にかつ適切に回し、必要であれば改善を図る。 ・今後の支援については、児童理解の会を中心に話し合い、共通理解するが、深刻な場合は、すぐに、校内支援委員会を開き、チームとして適切な支援を話し合い実行する。	・毎月、個々の児童の正確な現状を把握し全体で共通理解することができた。 ・1学期の児童理解の会の話し合いで、共通理解した児童の中に、専門相談員に参観及び懇談を依頼する事例があった。専門相談員と懇談した結果、今後の支援策をたてる手がかりとして発達検査を実施することになった。2学期は、該当児童が意欲的に学習に取り組むことができるように検査の結果をもとにして日常的にできる支援について保護者と連携し、実施していく。	
道徳教育	〈道徳科を要とした道徳教育の充実を図る〉 ・道徳科の授業を参観したり、管理職に指導・助言を得る機会を設定し、授業の質的改善を図る。 ・年1回以上、保護者に道徳授業を公開する。また、道徳の授業内容を学級通信で発信したり、親子道徳の日を設定し家庭への啓発を図ったりする。 ・道徳教育について理解を得るため、道徳的側面から見える児童の良さや成長を学級だよりやホームページ、掲示等を活用して積極的に発信する。	・1学期は、道徳の授業の交流や参観ができなかった。 ・夏休休業中に「家族愛」に関する実践の一つとして、全校で「親子の手紙」に取り組んだ。2学期は、学年だよりや学級通信に道徳の授業の様子を1回以上載せ、家庭での話題にしてもらえるようにする。 ・夏休みの宿題では、1学期に実施した教材を親子で読み、感想を書く活動を取り入れ、親子で道徳について考える時間を設定した。 ・各学級では、日頃の学校生活と道徳教材を結びつけ、課題や問題に対して向き合える場を設定し、解決していくことができた。その際には、学級通信を通して、学級での出来事や児童の成長・良さを伝えていくことができた。	
読書教育	読書が好きになる子どもを増やすための児童主体の図書委員会の活動を活性化 ・図書委員の子どもが主体的に取り組める活動を企画・運営できるようにする。 ・教科と関連した図書利用の計画を見直し、特に国語科では子どもにも心に響く本の紹介や読書に親しめるような活動を実施する。 ・紙媒体から電子媒体に移行できるものを検討する。	・図書委員の子どもが考えた活動を4・5・6月に企画し、実施した。4月、5月と子どもたちには好評だったが、当初の目的である図書館に来る児童を増やす、図書館に来る機会を増やすという目的の達成には課題が残った。委員会が6年生が中心となって行事の見直しを行い、6月の行事では目標は達成できた。 ・国語科を中心に図書利用は、各学年行っているが、本の紹介までは実施していない。夏休みには、各教諭におすすめの本を紹介するカードを書いてもらい図書に親しむコーナーを設置する予定である。 ・紙媒体から電子媒体に移行できるものは検討しているが、実施できていない。	
キャリア教育	〈系統的・計画的にキャリア教育を推進し、「学びの意義」や「勤労観・職業観」を高める〉 ・一昨年度設定した「学習の基盤となる資質、能力」をもとにした「振り返りの視点」をもとに肯定的な振り返りを行い、学びの意義を実感させる機会を増やす。 ・5年生の総合的な学習の時間の中に、将来の生き方を具体的に考える単元を設定し、実践することで、職業観、勤労観を深めたり、よりよく生きていこうとする主体性を高めたりする。	・1学期には、よりよい学級づくりや自己の成長を見つめる活動の中で、よりよい自分や学級の実現に向けて目標を設定し、定期的に振り返りを行うことで学びの意義や自己の成長を実感させてきた。今後も全校で継続していく。 ・5年生の総合的な学習「My Future, My Dream」では、未来社会の仕事について考えたり、自分のことを見つめたりする活動を通して、将来就きたい仕事について考えることができた。今後は、その仕事について調べ、活躍している偉れの人に宛てて手紙を書く活動、至道園、マンガラチャー、夢を叶える作文コンクール等の活動を通して、自分の将来の姿や学ぶ意義について考えさせる予定である。これらの活動を通して、勤労観、職業観を育んでいきたい。	
保健健康教育	〈自分の心とからだに関心を持ち、自ら健康で安全な生活に向けて改善を図る〉 ・「からだところのチェックリスト」を5・9月に実施し、メディア利用方法の個別の課題を把握する。その実態に応じて、集団・個別に適切な指導をする。 ・学校保健委員会のテーマに「メディアと睡眠」を取り上げ、メディアのやりすぎによる危険や望ましいメディアとの付き合い方について児童・保護者に啓発する。	・「からだところのチェックリスト」の5月分を実施した。全校児童の結果を児童理解の会で共有し、結果から課題の見えた児童には各担任がメディアの使い方の様子を個別に言う指導した。 ・6月の発育測定の際に養護教諭から、メディアの使いすぎがぼくす健康への被害について指導を行った。現在の自分の状況を振り返るいい機会となった。 ・夏休休業中に「夏休みげんき生活カード」の取組を行う。就寝・起床時刻を決めたり、メディアに関する時間やルールを決めたりすることで、望ましい生活習慣を身につけられるようにするためである。学期末に児童に説明するだけでなく、個人懇談の際に保護者にも取組の趣旨を説明し、 ・9月には2回目の「からだところのチェックリスト」の実施を予定している。2学期も結果を共有し、担任だけでなく、多数の教員の目引き続き児童の様子を見ていく。	
情報教育	〈GIGAスクール構想を推進し「キュビナの活用」「児童一人1台端末を活用して学ぶ授業」を充実させる。〉 ・全教員が、SKYMENU Classやカメラ機能、ファイル共有機能を利用し、意見を集約したり、全体に広げたりすることで対話的な学びを支援できるようにする。 ・「児童一人1台端末を活用して学ぶ授業」を推進するために、月1回、実践紹介タイムを設定する。具体的な実践紹介ができるよう工夫する。 ・すべての児童のタイピング技術の向上を目指し、朝タイムに計画的にタイピングの練習タイムを設定する。また、学校、家庭におけるキュビナの使用頻度を上げ、学力の向上を図る。	・職員会議後に実践紹介タイムを設け、授業を担当している先生方から実践報告の時間をとった。2学期以降も継続して行っていく。 ・情報担当の教員による、ICT研修へ行った際の実践報告を兼ねたOJを行った。児童を取り巻くネット環境も多様化している中、今、必要とされている情報モラル教育について、職員同士で学び合った。 ・1～6年すべての学年で朝タイムを中心にタイピングに取り組むことが出来ている。同時に「アルファベットマスター」というアプリを全児童の端末にインストールし、アルファベットへの理解を深め、タイピング力や英語力の向上に繋げた。 ・授業の中では、確認問題を解く場面や単元の週末の場面に使うなど、学校研究の取組と連携してキュビナの積極的活用に進めてきた。家庭学習では、週末の課題や夏休休業中の課題にキュビナを取り入れている。また、3年生以下の学年も、学習動画の視聴やカメラ機能を使う課題、漢字計算のドリル学習など、学習用端末を使う課題を取り入れている。	
家庭・地域社会との連携	〈地域に開かれた学校づくりを推進する〉 ・家庭、地域に学校の教育活動について、学校だより、ホームページ、コードモンを活用してこまめな情報発信に努め、地域に開かれた信頼される学校づくりを推進する。 ・参観日、学校公開等において感想用紙を配付し、積極的に保護者からの意見を聞く場を設定する。その感想をさらに発信し、双方向の意見交流の場とする。 ・総合的な学習の時間において、積極的に地域に出て、地域の方々とふれあう機会を更に増やす。	・定期的な学校だよりの発行、ホームページの更新を行い、地域へ情報発信することができた。また、地域の情報メール「ゆいネット」を通して学校からのお知らせを発信していた。今後もきめ細かな情報発信に努める。 ・参観日では、保護者より毎回感想をいただくようにした。その感想を今後の学校運営に生かしてきた。 ・2年生の町探検の単元において地域の方と触れ合う機会を設定することができた。	

学校関係者評価	・自治力を高めるための学校会議など、子ども主体で動くように様々なしかけを設定して「自分で考え、行動できる子」を育てていくことはとても良い。子どもの主体性を大切にしたい取組を今後も続けていってほしい。 ・児童の自己肯定感を高めるための取組、それを認め褒める先生方の日常的な声かけで、児童は確実に成長してきている。 ・メディアの良さや弊害について、負の部分についても具体的に教え、安易に発信しないことを教えることが大切である。 ・児童がどのような端末を使っているのか、現状をしっかりと把握すると良い。 ・いじめの現状は？ネットいじめはあるのか？いじめは決して許されないことであり、いじめのない学校作りを徹底してほしい。 ・自転車のヘルメット着用を徹底できないか。何かあってからでは遅いので、保護者・児童への働きかけを続けてほしい。 ・教育効果を上げるには保護者と連携が欠かせない。保護者を巻き込んで理解していただき協力を得ながら常に連携して取り組みを進めていってほしい。 ・先生方は頑張りすぎではないか？ 多くの取組には敬意を表するが、取組の精選も行うと良い。
---------	---